国防婦人の歌

勇士は練磨の銃を執り
身を切る風の砂を捲き
戦線万里を行くものを
われ等何をか黙すべき
同じ日出る国の子よ

海濤天を衝くところ
鉄溶かし砲を焼き
非常の波越す男の子らに
われ等何をか劣るべき
大和島根の撫子よ

をみなは弱しと誰がいふ
困難来る今日の日に
立たて安らふ心なし
われ等何をか怖るべき
紅の血潮はまごころぞ

立てよ進めよ丈夫よ
われ等銃後の花と咲き
針持つ腕を組合ひて
老若一に心せん
あと憂ひなく進まれよ

お身らの勲を思ふなら
お身らが屍の山を踏む
時を同じうわれも亦
護国の鬼の道一つ
照らす旭も皆一つ

歴史は長き三千歳を
汚さで守る国民の
誓ひも固き襷がけ
婦女の訓を胸に締め
いでや護らん同胞よ

銃後の花

一、平和の世には母として
　勤めを励む、をみならも
いざ戦の、日となれば
　銃後の人よ、諸共に

二、勇士を送る門出には
　心も赤き、日の丸の
御旗を捧げ万歳を
　泣きつつ叫ぶ、女気よ

三、留守をばまもる、夜な夜なは
　戦地へいった、人達の
労苦を思ひ、灯に
　針をば運ぶ、慰問品

四、いとし子等を、守り育て
　鋤鍬とりて耕して
をのこに代る、健気さは
　富にもまさる、誇りなれ

五、かくありてこそ、をのこらは
　後顧の憂ひ、消え去りて
御国のために、死ぬぞかし
　国をば護れ、をみならよ

大日本国防婦人会池内分会